三人姉妹

中河与一

集英社

著作者　中河与一
発行者　陶山巖
印刷者　草刈親雄

1963年2月1日　初版印刷
1963年2月5日　初版発行

三人姉妹　三五〇円

印刷所　中央精版
製本所　中央製本
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ツ橋二の三
電話 (301) 3201　振替 東京15653

© 1963　Y. Nakagawa　　Printed in Japan

目次

三人姉妹

彼の工房——7
志芽の上京——16
われ一切のものを新しくせん——31
心の迷い——36
祝福——42
那須高原——49
ハンナの家出——53
ハンナの失踪——67
康志の抗議——74
札幌に行く男——83
志芽の告白——90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

追われる男――93
家庭争議――101
ルツの旅日記――105
孤独な予感――112
慎吾の訪問――123
ファッション・ショウ――128
疑惑――135
異様な女――146
姉と妹――157
恋文の説明――159
過去からの清算――166
復讐――173
近よる足音――187
置手紙――191
新しい出発――193
あとがき――202

装釘　伊藤　明

三人姉妹

彼の工房

ケント紙いっぱいに書きこまれている下絵が、次第に濃い赤や緑の色彩でぬりつぶされていく。ルツは絵筆を持ったまま、漸く出来あがったその画面をしばらく見つめていたが、やっと満足したように、ポスター・カラーのついたままのその絵筆を、水の入ったコップの中に投げこんだ。

コツン……と柔らかくこもった音が耳に響いた。水の中に放された緑色の絵具は、湧きあがる雲のようにゆれひろがりながら、水に混りあい、早春の日ざしに透明ににじんでいった。

ルツはボンヤリした眼でその水の動きを見つめていた。一仕事終ったあとの神経が快くほぐされてゆくようだった。

「どぎつい図案だね。南方向けかい」

その時、眠っているとばかり思っていた父親の声が、突然そばに敷いてある寝床の中からした。

ルツはギクリとしたように、声の方をふり向いた。

長患いの父がこんな色合をじっと忍耐しながら今まで見ていたのかと思うと、ちょっと気の毒な気がした。

しかし、格別嫌悪している口調でもないことにすぐ気がついた。

「いいえ、これはね、国内向けですの」

「輸出ものじゃなかったのかい。やっぱりスカーフの図案だろう」
「ええ……でもこの頃、輸出の方はさっぱり駄目なんですって。だから私も内地向けの図案ばかり描いているの」
「ほう……」
父親は感慨ふかい声を出したが、彼はルツの言った日本の輸出のことについて考えているのではなかった。こんな大胆な図柄を首に巻いて歩くようにまで、日本の女性達の感覚が変化していった年月のことを考えていたのである。そして、その間の年月というものを、毎日病床の中で、ただ庭先きとルツの顔だけを眺めて暮してきた自分のことを改めて思いかえしていたのであった。
彼はすぐつけ加えて言った。
「ちょっとの間に世の中は変ってしまったもんだな。もう見当もつかなくなってしまった」
しかしルツはそんな感想には格別の感慨もなさそうに、二、三日前からせっせと書きためてきた五、六枚の図案を、その辺にひろげて眺めていた。
それは大阪に嫁いでいる妹の志芽が、上京してくるという通知をよこして以来、急に描きためたものであった。
彼女はすぐに図案をもって横浜に行かねばならないと考えていた。この中で何枚売れるかわからないが、そのことは久しぶりで上京してくる妹の志芽を、わずかながらでももてなすためには、さしせまって必要だと思った。
「お父様、明日の今ごろは、もう志芽が家にきているはずよ……三年ぶりですわ。早く明日になればいいのにね……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ルツは幼く笑いながら、立ちあがって鏡台の前に行くと、絵具のついた茶っぽい仕事着（ブルーズ）をぬぎ、外出の仕度をはじめた。

ほんの少しばかり顔にはたきつけたパウダーが、あと二、三ヵ月で満二十九歳になろうとしている彼女の肌を明るくし、包みこんでいる若さを外にはじき出すように見えた。

ルツは父親一人寝たままの家の戸締りをし、自分が留守の間、父に不自由のないように枕もとを整理すると、外に出た。外は明るくキラキラする光が街上にみちていた。

ルツが何時も図案を持ちこむ家は横浜に二、三軒あったが、それぞれの店によって図柄の好みがちがっていった。

ルツが今日行こうと思っているのは、関川慎吾という若い優秀な商業美術家で、ルツは彼に紹介されて以来、彼の写真や記事を時どき新聞や雑誌でみるたびに、彼に対して尊敬を深めていた。

東横線を桜木町で降りて、伊勢佐木町を五、六百メートル行ったあたり、住友銀行の辺を右折して国際服装女学院という学校に並んで彼の瀟洒な工房（スタジオ）は建っていた。そのあたりは、もとアメリカ軍の駐留していたあとらしく、繁華な街裏にしては珍らしく、広い空地がつづいていた。

ルツがこの工房を訪ねたのは、これが二度目であった。もっとも前の時は紹介者と一緒だったから、一人で訪ねたのは今日が最初であったと言っていい。

取次ぎに出た若い助手風の女性が奥に引っこんでゆくと、ルツはそこに立ったまま部屋の様子を眺めた。

その部屋には、ポスターや図案などがベタベタと壁に張りつけてあって、なにか幼稚園の教室のような明るい無邪気な雰囲気があった。

やがて奥の部屋から出てきた関川は、いきなりルツに椅子をすすめて言った。
「しばらくでしたね。あれからすぐにもまた見えるかと思ってお待ちしていたんですよ」
彼女は一、二度しかまだ逢ったことのない男のこんな言葉にとまどった。そこですぐに仕事のことを言いだした。
「今日は五、六枚描いてまいったんですけれど、御覧いただけますかしら」
「拝見しましょう」
いきなり関川にそう言われると、急にルツは自信を失ってちょっとの間、マゴマゴした気持になったが、思い切りよく持って来た図案を風呂敷の中から出して、彼の前にならべた。
関川は戦後急に有名になったデザイナーで、ルツの描いた図案を一枚一枚とりあげると、目の高さにあげて、長い間それを見つめていた。
ルツは鋭くなってゆく関川の眼を見ながら、彼の美術家としての高い鑑識が、そのまま急に強烈で敏捷な商人の根性に変化してゆくような気がしはじめた。彼が今なにを考えているか理解できないように思われてきた。ルツは今にも彼の口からイヤな言葉が飛びだすのではないかと思うと、情ない顔になってゆくのを感じた。ものを売ろうとする人間の卑屈な心理が自分の心の中に湧くのを覚えた。
ルツの父、浅香恵祐(けいすけ)はもと牧師をしていた。ルツはその三人姉妹の長女であった。次女の志芽は大阪の裕福な木綿問屋にのぞまれて嫁いでいって、二人の男の子があり、三女のハンナは上智大学を出た大学の教師と三年前結婚して女の子一人を産み、目黒の柿の木坂の近くに住んでいた。二人とも十九歳で結婚していた。

母親のないルツは、二人の妹たちを自分よりも先きに結婚させたあと、一人家に残って長い間結核で起てない隠退牧師の老父を看病しながら、かよわい女手一つでどうやら生活を支えてきた。ルツはこうして自分の描きあげた図案を売るために見せるその時間が何よりも苦痛でならなかった。その点志芽やハンナは、今の彼女が味っているような種類の辛さなど到底想像することも出来ないだろうし、ルツは妹たちの今の境遇をなんということなしに羨望していた。

「浅香さん」

その時、関川の声が耳もとできこえた。

「これ、みんないただきましょう」

「えッ」

ルツは驚いて関川を見つめた。そんな時、必ず欠点を指摘されたり、聞きづらいことのひとくさりを聞かねばならぬことは、いつものことだったし、そのうえ十枚のうちやっと二、三枚売れればいいのが今までの習慣だったから……

特徴のある大きな眼を一層大きく見はって少女のような驚きを示しているルツの前に、彼は丁寧に十枚の紙幣を置いた。

「では、これを……」

「まあ、そんなにいただいていいんですの」

「どうぞ」

「でも……」

「でも……って、なんですか。僕が損でもすると仰言るんですか」

彼は青年らしい快活な口調で言ってから、さもおかしそうに低く笑った。
「でも今まで国内ものは一枚五百円位でした」
「それはひどいですね。僕は親父がその方の工場を持っていますから、こういう図案の方は簡単なんですよ。親父との協定なんですから……それに浅香さんのセンスは何というか、驚くほど僕にピッタリくるんです」
「まあ、そんなこと……」
ルツは真っ赤になった。認められたことによるなんともしれない喜びと親和の感情がこみあげてきた。
関川はポケットからスリー・キャッスルをだし、これに火をつけて、静かに吸いこみながら、そのまま黙って美術品でも鑑賞するように、しげしげとルツを眺めだしたが、ちょっといたずらっぽい笑いをかみころした表情になった。
「浅香さん、さっきからあなたを見ているんですが、なにかに似てますね」
「……」
関川は煙草の火を灰皿の中でもみ消しながら、何か思いだそうとするような表情をしていた。
「何に似ていますの」
重ねて聞きかえした。
「鶴かな……首の長いところ」
思いきった調子でズバリと言った。
「よくそう言われますのよ。だけど私、鶴ではありませんわ。鶴の反対ですの。私の名前は片仮名

でルツって書きますのよ」
「ルツ？」
「ええ、そうです。だから鶴の反対ですわ」
「鶴でなければ……じゃ何にするかな。モヂリアニはどうだろうか」
二人は声をたてて笑った。モヂリアニというのはフランスの画家で、この若くして死んだ天才は、好んで首の長い女を叙情的に描いていた。
「おかしいでしょう。皆に笑われてますのよ」
「とんでもない。おかしいもんですか。色合いといい、太さ、長さ、なかなか滅多にない首ですよ。描かしてほしいな。「ルツの首」という画題もいいな。ところでその首、つけ根がしっかりしていて、浮世絵とも違うし、やっぱり西欧的だな。もっと逞しくすれば馬の首、細くすればろくろ首、危機一髪のところでなかなかスリルがある。いい首だな」
「首って、とても困るんですの、整形手術もできませんし……」
「首のすげかえは文字通り死活問題だからな。ハッハッハッ……だがその首、とてもいい首ですよ。大切にしなさい」
関川は大きい声で笑ってから言った。
「でも少しバセドー氏病みたいに、喉ぶえの下がふくれているでしょう。だから嫌なの」
ルツは顔を真赤にした。手で自分の首をつかむようにしてかくした。
「それ、フランス王朝の貴婦人の首にも似たのがありますよ。マリー・アントアネットだってバセドー氏病の傾向だし。それにしてもルツとは変った名前ですね」

「でもこの名前ね、父がもと牧師をしてたもんですから、旧約聖書の中の信仰の厚い女性の名をとってつけてくれたんですわ。変った名前って言えば、私の三人姉妹ともみな変った名前なんですの。私のすぐ下の妹が志芽、これはシメオンという男の予言者ですが、父はこの人が生れたばかりのキリストを見てうたった詩が大変好きなんですって、それでその名をもじって志芽ってつけたんですって。その下の妹がハンナ。これは新約に出てくる女の予言者の名前……」

「じゃ、あなたは現在、熱烈なクリスチャンってわけですか」

彼は熱烈というところをひどく強めて言った。ちょっと弥次っているようにも聞えた。

「さあ……熱烈っていうほどのことはありませんけど。でも……」

「そうかなあ……僕には宗教なんて信じられないけど……」

彼はハッキリした口調で言って、

「僕の妻君なんかも、クリスチャンですが……」

「私にもよくわかりませんわ。でも父は……父は結核になって今牧師をやめていますが、私が懐疑的になったりすると、いつも申しますの。プロチノスという人が、人は自分に無いものを理解することはむずかしい、眼に太陽を持たなければ見ることはできないって、言っているのは正しいと言うんですよ。自分に理解できないからといって、それを否定する人間の傲慢さや未熟さは警戒しなければいけないって。ですから神に対して疑いを持ったり、何故というようなことを言ってはいけないって。ただ信じて祈りなさいといつもお説教されてきましたわ」

言いながら、ルツは熱心になっているのに気づいて話をやめた。

「たいしたもんだな……それで今もお父様は寝ていらっしゃるんですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com